

## 若いがん患者 仙台で交流カフェ

# AYA世代の不安笑顔に

10代半ば〜30代の「AYA(アヤ)世代」と呼ばれる若いがん患者の交流を支援しようと、宮城県内の看護師らが、仙台市青葉区の東北大学医学部でカフェを開いた。がん医療や社会的支援の「谷間」で孤立しがちとされる年代に光を当て、闘病と社会復帰の支えとなる取り組みだ。

AYA(思春期と若年成人を指す英語の頭文字)世代は進学や就職、結婚などの重要な転機と闘病が重なりながらも、治療や研究の遅れが課題とされている。患者会も女性の乳がんなどに限られた年代だ。

そうした現状を踏まえて初開催された今回の患者カフェ。患者や家族、友人など約20人が集まった。

### 勇気づけられた

「(胃がんの手術後)胃がないと、どれだけ食べられないか不安だよね」「大丈夫。徐々に食べるようになるよ」二つのテーブルに分かれた男女は約2時間、リラックスした雰囲気です。

病状や仕事について語り合ったり、女性は身近な話題の女子会トークを楽しんだりした。

胃がんを患ったという30代男性は「こうした機会はめったにない。みんなから頑張っている話を聞いて、勇気づけられた」と笑顔で会場を後にした。

## 患者発案、看護師ら企画

# 闘病や社会復帰 後押し

### 特有の悩み共有

若年性乳がん体験者の会「ピンクリング」東北支部の菅原祐美代表も参加し、

「がんの種類は違っても、人生のイベントと治療を並行して続けなければいけないAYA世代特有の悩みを共有できた」と話した。

運営に当たったのは、宮城県立がんセンター(名取市)に勤務する熊谷香織さんらが看護専門の看護師と協力し、東北大での初開催にこぎ着けた。熊谷さんは「特に男性患者は情報交換の場が限られている。悩みを少しでも解消し、つながりを得てくれればうれしい」と期待した。

胃がんの治療を続ける30代男性から「同年代の患者と話す場がほしい」と相談を持ちかけられたことがきっかけだった。

恩師である佐藤富美子・東北大学大学院医学系研究科教授(がん看護学)に相談。佐藤教授や同門の看護師らと協力し、東北大での初開催にこぎ着けた。熊谷さんは「特に男性患者は情報交換の場が限られている。悩みを少しでも解消し、つながりを得てくれればうれしい」と期待した。



会話を弾ませるカフェ参加者＝8月3日

小児がんと40代以上に挟まれ、患者数の少ないAYA世代を専門とした体制整備は、東京や大阪、静岡などの医療機関に限られる。佐藤教授は「小児からAYA、そして壮年期へと、就労や社会生活への支援といった切れ目のないケアが、これからのがん対策に求められる」と指摘する。